

目 次

文化知の創造

研究資料 ソシユールの思想

A 丸山圭三郎『ソシユールの思想』

B 丸山圭三郎『ソシユールを読む』

第6期ASSBの刊行にあたって

別冊付録「ソシユール講義(抄)」

編集人 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町京都中郵私書箱169号
貿易研究会

会費 正会員 : 年間1口 10万円
賛助会員 : 年間1口 3万円
購読会員 : 年間1口 1万円

会費振込先(郵便振替) (口座名) 資本論研究会
(口座番号) 01090-5-67283

はじめに

1996年8月発行の本誌（第4巻第1号）で協同社会の研究所設立をかけた、当分の間の理論活動の目標を研究所設立意思の解明においてきました。

以降いくつかの研究会に参加し、また昨年末からPC講座も始めたことで問題意識が鮮明となり、構想がまとまりつつあります。それでとりあえずのたたき台として文章化しました。御検討下さい。

第1章 文化知とは何か

1) 相対化される科学知

文化を広い意味で生活様式と捉え、それに根ざした知の形態を文化知と呼ぼう。歴史上種々な知の形態があった。中世ヨーロッパにおいては宗教が知の形態の最高のものでされていたが、近世に入って科学知がそれにとって代わった。

しばらくは科学と技術は不可侵のものでされていたが、今日では科学知の位置はゆるいできている。とくに人生の生きがいを求めている若い人たちの間では科学知は求めるものを何も与えてくれない、ということで、宇宙意思とか、波動とかのオカルト知がさかえ、また宗教知も復活している。

2) 科学知の限界

科学知が相対化された原因は、科学知そのものの内にあった。というのも、それは人間にとって身近なものとしてある社会関係についてほとんど何も解明しえていないからである。例えば労働の社会的関係の産物であり、それなしには生活できない商品や貨幣について、マルクスが解明しているにもかかわらず、定説がない。ましてや言葉とは何かとか、思考とは何か、といったことになると何もわかっていないといってよい。

このように科学知は社会的存在としての人間を解明するという点では無力であった。ではそれに代わるものとして登場してきているオカルトや信仰で問題が解決されるだろうか。幻想や信仰で人間の類的存在を知り、生きがいを探る、といった流行の試みに代わる知の形態が創りあげられねばならない。

3) 科学の方法の刷新

文化知とは科学知の否定ではない。それは科学知の限界をこえて、社会的存在としての人間を解明し、類の実現形態を明らかにしていく。その際に文化知が順守するものはあくまで科学の方法である。とはいえ文化知を生み出すには科学の方法自体が刷新されねばならない。

文化知は科学知を相対化するが、それは科学の方法の刷新によってである。だから、文化知を、科学知を相対化した人間科学と特徴づけることができる。

つまり社会的存在としての人間、人間の社会的関係を解明するためには科学の方法の刷新が必要であり、この刷新が科学知を相対化する。

第2章 文化知創造の方法

4) 科学の方法への反省

科学思想史をひもとけば、近代的な科学知の方法の創始者はデカルトとガリレオとされている。数学的物理学が世界の真理を説きあかすとみなす科学知の方法に対し、1930年代にはフッサールによって批判が試みられた。フッサールによれば、ガリレオは経験的な実験から理論をつくりあげるときに、数学的な規定を与えられた、理念性の世界をつくりあげたが、その際この世界のみが唯一の世界とされ、それが日常的な生活世界にすり替えられてしまうことによって、生活世界が隠蔽された、というのである。

このようなフッサールの観点は、デカルトと同時代人のヴィーコによって表明されていた。ヴィーコによれば人間がその存在の真理性を証明できるのは、それを人間が作っているからであり、人間が作ったものではない自然に関しては究極的な真理の証明は不可能で、たえず探究がなされねばならないのであった。

マルクスも、ヴィーコの説を肯定的に捉えていたし、また、科学の方法によって得られた対象についての理論が、対象を科学的にわがものとする思考にとっての方法であり、それ自体は思考産物であって、対象とは区別されたものとみなしていた。

そして、マルクスは、価値形態の分析に際し、従来の科学の方法を刷新したが、しかし、その方法は分析内容と一体となっており、弁証法についての概略を書きたいという意志があったものの、方法論として提示されないままに終わった。

5) 現象学の限界

従来の科学知は思考産物を対象についての真理とみなしていた。この方法に従えば対象はあくまでも客体にとどまっていた。ところが人間の社会関係は主体相互の関係であり、主体—客体という図式を適用できない。

フッサールにはじまる現象学は、従来の科学知の方法では捉え切れない領域を生活世界と規定し、そこにおける人間の間主体性を説きあかそうとしているが、しかし、人間

の間主体性の現実的形態である商品や貨幣の分析をふまえないのでせいぜい心理学的知識を哲学体系のうちにとり込むことしかできていない。

そもそも哲学自体存在の論理と思考の論理の同一性という科学知と同じ前提の上に成立している。この前提があるからこそ、哲学は存在とは何か、ということについての思弁を展開できたのである。従って現代の哲学者たちも、その言葉に反して、実際には従来の科学の方法の枠にとどまり、科学知への根底的な批判には成功しなかったのである。

6) 価値形態論解説の意義

現象学の提出した生活世界、それは今日の人間の社会生活ということだが、そこにあって最も身近な存在は商品や貨幣である。商品や貨幣が単なる物ではなく、人間の社会的関係であるが故に、それを分析しようとするれば、主体—客体図式は役に立たない。従来の科学の方法の刷新がせまられる。

商品、貨幣の秘密についてはマルクスが『資本論』の価値形態論で一たんは明らかにしたが、しかし、科学知全盛の時代ということもあり、マルクスの解法自体が謎とされてしまっている。そこでマルクスの価値形態論の解説を通して、刷新された科学の方法を定式化していくことが文化知創造の方法となる。

第3章 文化知の方法

7) 超感性的な現象形態

文化知の対象はとりあえずは人間の社会的関係であるが、それは超感性的なものである。商品や貨幣にしても、個々の使用価値や通貨をとりあげても何もわからない。感性的につかみうる個物が相互に社会的関係を取り結んでいるとき、この不可視の関係そのものを捉える方法ははたしてあるのだろうか。

関係そのものは感性では捉えられず、それは人間が思考産物として頭の中で組み立てることが出来るだけである。ところが関係の両極については人間の感性で捉えることができる。この両極としてあらわれている具体的なものを素材にして関係そのものの概念を思考産物として組み立てること、そのための方法がいま問われている。

8) 関係としてしか存在しない実体の発見

従来の関係の哲学にあつては、通常実体性が否定される。両極にある物の実体性は関係の中では否定されているので、この考え方に一面の真理はある。しかし、いま問われているものは、関係としてしか存在しない実体であり、社会的な実体を想定することである。

ソシュールがコトバは差異の体系だと述べたことに発し、商品の価値も差異の体系で、労働価値など存在しない、という説が流行している。関係が実体を否定すると考えてい

る哲学者たちは、価値の実体性を否定することで、実は関係における同一性を否定している、ということに気付いていない。ところが同一性のないところに関係はなく、関係がなければ差異もない。商品にしても、コトバにしても、国家にしても、それが人間の社会的関係である以上、同一性があり、それこそが関係としてしか存在しない実体なのである。マルクスの価値の実体とは、個物としての実体的なものではなく、社会的同一性の基体という意味での実体性なのである。

9) 形態規定

関係としてしか存在しない実体が想定されることではじめて社会的関係における両極が、超感性的なものであるにもかかわらずどのような現象形態をとるかが判明する。

その時両極にあるものは、その本来の形態とは別にもう一つの形態をもつことになる。但し、その形態は超感性的である。

マルクスが形態規定と述べているのは、この社会的なものの2重の形態を捉える方法である。社会的なもの(物象)は本来の自然形態の他に社会関係によって形態規定されて新しい役割をもつ。

10) 思考の論理と存在の論理

これまでの科学の方法は人間の思考の論理に従ったものだった。それは対象を分析することで抽象し、多くの規定へと還元したうえで今度はそれを思考のうちで総合し、多様なものの統一としての概念を得る。ガリレオ的の科学至上主義の誤りはこの概念をそのまま対象についての真理とした点にある。

ところが人間の社会的関係にあつては、その関係の中で同一性と差異が確立される。ということはこの関係の中で人間の思考作用と同じ抽象と総合がなされていることになる。

その際注意すべきは、人間の思考が抽象するのは分析によってだが、関係にあつては総合によって抽象が行われることであり、ここに思考の論理とは区別された存在の論理を発見できる、ということである。

11) 類と個の転倒

思考の論理でストレートに捉えられるのは、関係から切断された対象である。関係から切断された対象とは、それ自体自然物ではなく、人工物である。従ってそれは道具とともに思考の延長となる。ヴィーコが言うように科学知が捉える真理はこの領域にある。

この領域では個物のみが実存し、それらを多様な統一として分析し、総合することで得られた概念のなかでは一般的で類的なものは抽象的規定となり、個物としての存在はありえない。

ところが関係を捉えようとする文化知の方法に従えば、抽象化は総合のうちに行われ

ていることがわかり、関係にあつては抽象的で一般的で類的なものがその極にある個物の形態規定として現れることで、具体的な個物が、一般的で類的なものの実現形態とされることになる。この社会的関係におけるまわり道と転倒の構造を捉えるところに弁証法の核心があり、文化知の方法の根本がある。

おわりに

ここで提起した方法は、マルクスの価値形態論の解説にもとづいた、刷新された科学の方法の大枠です。この文化知を創造する新たな方法を言語学や記号学の分野に応用することが当面の課題となりました。そこでソシュールの思想をとりあげますが、今回は基礎資料の整理にとどまりました。次号には内容提起をします。

研究資料 ソシュールの思想

解題

科学知がゆきついてしまった限界を克服するところに形成される知の形態を文化知と規定するとき、それは人間の社会的存在についての知となる他はない。そしてそれは社会的人間にとっての身近な存在である商品や言語や政治の解明を不可欠のものとする。

そこで言語とは何か、ということについての解明を進めようと思うが、その際にまずソシュールの思想の研究から始めることが必要である。ところがソシュールについては、有名な『一般言語学講義』の文献学的研究が進むことで、この「講義」の原資料に当たることが義務づけられるが、しかし、膨大な原資料はまだ翻訳されていない。

現在日本語で読めるソシュールの文献は、原資料の第二回講義の序説が前田英樹訳『ソシュール講義録注解』（法政大学出版会）として出版されているだけである。あと、「論議」についての膨大なテキストフリティークをしたしめたデ・マウロのイタリア語版が山内美貴夫訳『ソシュール「一般言語学講義」校注』（而立書房）として出ている。

それ以外には丸山圭三郎の『ソシュールの思想』『ソシュールを読む』（岩波書店）に紹介されている原資料をつないでみる努力をする他はない。そこで今回は、『ソシュールの思想』から原資料と丸山の解説とを抜き出し、ソシュール研究のための資料としたい。なお、『ソシュールを読む』は、ソシュールの三回の講義の原資料による再現が試みられており、これからの原資料の紹介を別冊付録として付けておきたい。前田の訳になる第二回講義序説を中心に、これらソシュール原資料を読み通すことがとりあえずの課題である。

原資料についての凡例

1) 原資料の発見

『一般言語学講義』（以下『講義』と略記）の原資料は①1955年1月、②1957年12月、③1958年はじめ、の3回にわたって発見された。

2) 原資料の出版と断章番号

①ゴデル『一般言語学講義原資料』（1957年）

ソシュールの3回の講義を原資料にもとづき再現した。

第1回講義 1～49番 (1906～7年度)

第2回講義 50～94番 (1908～9年度)

第3回講義 95～155番 (1910～11年度)

ex. SMI30とあれば、第1回講義ゴデル断章番号30であることを示す。

②エングラール『一般言語学講義校訂版』（未完結）

見開き6つの欄があり、左から順に『講義』、学生のノート、ソシュールの手稿と並べられ、比較対照できる。

『講義』	1～3281番
音声学講義録	3282番
ソシュールの手稿	3283～3347番
リードランジュとカイユの第1回講義録	3348番
リードランジュらの第2回講義録	3349番
コンスタンタンらの第3回講義録	3350番
1911～2年度の講義ノート	3351番
1909～10年度の講義ノート	3352番
1909～10年度の形態論講義ノート	3353番
史的音声学に関する手稿	3354番
バイイとセシユエの講義序文	3355～7番

③ゴデル『第2回講義序説』

これには翻訳書がある。前田英樹訳『ソシュール講義録注解』（法大出版会）

A) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』

はじめに

丸山圭三郎はソシュール原資料を研究し、ソシュール理論とその基本概念を次のように整理している。

1) 言語能力と社会制度と個人

①ランガージュとラング

②ラングとパロール

2) 体系の概念

①価値体系としてのラング

②連辞関係と連合関係

③共時態と通時態

3) 記号理論

①言語名称目録観の否定

②シニフィアンとシニフィエ

③形相と実質

④言語記号の恣意性

⑤記号学と神話・アナグラム研究

ここでは丸山によって捉えられたソシユールの理論について、まず丸山が依拠している原資料を先に集め、次に丸山の解説を紹介していくことにしたい。なお、ソシユール文献学については『ソシユール小事典』（大修館書店）を参照されたい。なお、丸山の解説の紹介は、正確な引用ではない。

1) 言語能力と社会制度と個人

①ランゲージとラング

a) ソシユール原資料

「われわれが直面せねばならない対象をどこに見出したらよいのであろうか。…自らをその前に位置させるべき素材をもたないということは、他のいくつかの科学には存在しない困難な問題なのである。」（SMⅢ、123）

「ランゲージは、人類を他の動物から弁別するしるしであり、人類学的な、あるいは社会学的といってもよい性格をもつ能力と見做される。」（手稿1、3283～8）

「ラングとは、ランゲージ能力の行使を個人に可能にすべく社会が採り入れた、必要な契約の総体である。」（SMⅡ、160）

「個々人には分節言語能力と呼ぶことができる一つの能力がある。…しかし、これはあくまで能力に過ぎず、外から与えられるもう一つのもの、すなわちラングなしにこれを行行使することは事実上不可能であろう。ランゲージは抽象的なものであり、それが現前するためには人間存在を前提とする。…このようにランゲージ能力とラングを区別することによって、我々は、ラングに〈産物〉の名を与えることができることがわかる。これは社会的産物なのである。ランゲージは、常にラングによって現前すると言えらるであろう。」（SMⅢ、159、230）

「自然が与えてくれるものは分節言語を使用できるように造られた人間であるが、分節言語を最初からは持たない人間である。個人は、話すように生まれついているが、この道具を行行使できるようになるのは、彼をとりまく社会によってのみである。」（手稿6、3292）

「ランゲージは、一つの潜勢、一つの能力に過ぎず、…個人ひとりでは決してラングに達することはないだろう。ラングはすぐれて社会的なものである。いかなる事象も、その出発点はどうあれ、それが万人の事象となる瞬間までは言語的に存在しない。」

（SMⅡ、155）

b) 丸山の解説

ソシユールは言語学の対象である「言葉」をどう規定するかについて考察している。まず人間のもつ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化の能力およびその諸活動をランゲージとよび、個別言語共同体で用いられている多種多様な国語体をラングとよんでこの二つを区別した。

ランゲージは言語能力と訳せる述語で、これこそ人間文化の根柢に見いだされる生得的な普遍的潜在能力であり、この力は、その間接性、代替性、象徴性、抽象性によって、人間の一切の文化的営為を可能にせしめた。

これに対してラングとは言語という訳があてられる概念で、ランゲージがそれぞれ個別の社会において顕現されたものであり、その社会固有の独自の構造をもった制度である。

ランゲージは自然に対置された人間文化の源であり、ラングは社会との関係において歴史的、地理的に多様化している個別文化に当たり、さらにランゲージは潜在能力、ラングはこれが社会的に顕在化した構造であり、構造という言葉はラングにしかあてはまらず、ランゲージは構造ではなく、構造化する能力である。

②ラングとパロール

a) ソシユール原資料

「パロールとは、ラングという社会契約によって自らの能力を実現する個人の行為の謂である。パロールのなかには、社会契約によって容認されたものの実現という概念がふくまれている。」（SMⅡ、160）

「ラング=受動的で集団のなかに存在する。これは、ランゲージを組織化し、ランゲージ能力の行使に必要な道具を形成する、社会的コードである。

パロール=能動的で個人的なもの。二つをものを区別せねばならない。一、ランゲージを実現するための一般的能力の行使（発生作用など）。二、個人の思想に基づいた、ラングのコードの個人的行使。」（SMⅢ、245～7）

「単に諸関係を創り出すのみならずそれらの関係を理解するためには、無意識的比較の行為が必要である。…人が語るためには、ラングの宝庫が常に必要であるというのも事実であるが、それとは逆に、ラングに入るものはすべてまずパロールにおいて何回も試みられ、その結果、持続可能な刻印を生み出すまでくりかえされたものである。ラングとはパロールによって喚起されたものの容認に過ぎない。」（SMⅠ、2522、2560）

「結論は次のようになる。二つの対象、ラングとパロールが、お互いを前提とし、その存在は他の存在なしにあり得ないことも真実なら、それとは反対に、両者の特質があまりにも似通っていないので、それぞれ別の理論を必要とするということも事実である。この二つを一緒にしたものに言語学の名を冠すべきか、それともラングの研究だけに言語学の名をとっておくべきか？我々は、ラングの言語学とパロールの言語学を二つ別々に考えることができるのである。こうは言っても、ラングの言語学をあつかう時、パロールの言語学に少しでも立ち入ってはならないなどと結論してはいけない。そうすることは有用であろう。ただ、その仕事は、隣接領域から理論を借用するという事なのだ。」（SMⅢ、342、367、370）

「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものは同じ行為の心理的、精神的側面を代表している一。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の観念が、とりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。」（手稿1、3284）

「言語学者は、最初の諸言語の多様性を研究する以外にすべはない。彼はまず、諸言語を、それも可能な限りの言語を研究し、出来る限り自らの地平を拡げねばならない。…こうした諸言語の研究と観察を通して、言語学者はそこから一般的な特徴を抽出し、本質的かつ普遍的と思われるすべてを残して、偶然による個別的な事象をわきよけておくことができるようになるだろう。そうした彼の前に残るものは、抽象の総体であり、これが言語と呼ばれるものである。言語の中に、我々はさまざまな言語において観察される事象を要約している。」(SMⅢ、429)

「何人かの高名な学者が言った。『コトバは全く人間外の存在で、即自的に組織され、人類の表面にひろがった寄生植物の如きものである』と。他の人々は、『コトバは人間のものであるが、自然の機能に従っている』と言った。ホイットニー曰く、『コトバは人間の制度である。』この考え方は、言語学の軸を変えた。

それに続くものは言うだろう。『それは人間の制度であるが、その特性はエクリチュールを別にしてあまりにも他の諸制度と異なるので、このアナロジーを信用すると、コトバの本質を見誤ってしまう恐れがある。事実、他の諸制度は、程度の差こそあれすべて自然の關係に基盤を置いており、究極の原理として事物の合目的性の上に依拠している。たとえば、一国の法律とか、政治制度にしても、また人の着る衣服の流行にしても、我々の衣服を決めるあの移り気な流行すらが、一瞬たりとも人間の身体の大きさという所与からのがれることはできない。

しかし、コトバとエクリチュールは、事物の自然な關係にその基盤を置いていないのである』と。」(手稿10、3297)

b) 丸山の解説

ラングを社会的な、超個人的な制度と捉えることで、特定の話し手によって発話される具体的音声の連続をパロールとしてラングと区別する必要がある。ラングとパロールとの關係では、ラングが潜在的構造であるのに対し、パロールはこれを顕在化し、具体化したものと言える。

次に、ラングとパロールの両者は相互依存の關係にある。一般のコードとメッセージとの關係と異なり、ラングとしての約束事ができるにはパロールが先行しなければならないが、しかし、ラングは個々のパロールを拘束している。ここには作られつつ作るという相互規定がある。

ところで丸山によれば、ラングとパロールの概念についてはソシユール自身ゆらいでいたという。ソシユールは当初二種のパロールを考えていた。一つは物理的・生理的な面であり、もう一つは精神的・心理的な面である。しかしその後この精神的なものを全てラングに属せしめようとした時期や、これをパロールの概念に含めた時期を通して、第三回講義にいたると、パロールを生理的実行と精神的実行との二つに分ける定義におちついた、というのである。

丸山は第一のパロールは全く物理的・偶然的な現象で、言語学の対象にはならないが、第二をパロールに含めたことで、それが類推的創造の源であることで、パロールを言語学の対象としかるることになったと見ている。

他方、ラングの概念も多義的である。自然言語をさす場合や言語一般をさす場合や、

記号学的原理をさす場合もある。

丸山によれば、記号学的原理としてのラングの概念は、一つの価値体系であり、その価値は一切の自然的・絶対的特性による規定をのがれる純粋な關係の網の対立から生じる、というもので、この概念は言語をはなれても色々な文化事象に適用できると主張している。そしてこの考え方が科学方法論上面期的な意味をもち、理論モデルを作る際にそれ自体を操作することで潜在構造である非可視的実体を明るみに出す方法をとらねばならないと述べている。

2) 体系の概念

①価値体系としてのラング

a) ソシユール原資料

「コトバは根底的に、対立に基盤を置く体系という特性をもつ。(ちょうど、さまざまな駒に付与された力のさまざまな組み合わせから成り立つチェスゲームのように。)ラングはいくつかの単位の対立のなかに存在し、その他の基体を有さないものであるから、…それらの単位を知らずにすませることはできない。それらがどのようなものであれ、われわれはその助けなしには一歩も前に進むことができない。」(SMⅡ、1750)

「コトバの中に自然に与えられている事物を見る幻想の根は深い」(手稿9、3295)

「人間が樹立する事物間の絆は、事物に先立って存在し、事物を決定する働きをなす。他の場所においては事物すなわち、与えられた対象が存在し、ついでそれをさまざまな視点から観察することができる。此処においては、それが正しいにせよ誤っているにせよ、まず在るものは視点だけであって、人間はこの視点によって二次的に事物を創造する。…いかなる事物も、いかなる対象も、一瞬たりとも即自的には与えられていない。」(手稿9、3295a)

「語や辞項から出発して体系を抜き出してはならない。そうすることは、諸辞項が前以て絶対的価値を持ち、体系を得るためには、それらをただ組み立てさえすればよいという考えに立つことになってしまうだろう。その反対に、出発すべきは体系からであり、互いに固く結ばれた全体からである。」(SMⅢ、1848)

「ある語の価値は、共存する諸辞項の力を借りてはじめて決定され、これらがその語を限定する。」(SMⅢ、1875)

「価値は他の所与によって与えられる。それは…ラングの中の諸項との相互的位置によって与えられる。境界画定を行うのは価値自身であろう。単位ははじめから区切られているのではない。そこにラングの特殊性がある。」(SMⅡ、1862)

「すべての価値の大きさは相互に依存している。たとえば、フランス語で《jugement(判断)》とは何かを決定しようと欲する場合、その語を取り巻くものによってしかこれを定義できない。その語自身が何であるかを示したい場合でも、また何々ではないということを示したい場合でも。この語を外国語に翻訳したいと思う時も同じことである。だからこそ、記号や語を体系全体の中で考察する必要性が生ずるのである。同様に、同義語《craindre(おそれる)、redouter(こわがる)》も、一方が他方の傍らにあつて

はじめて成立する。craindreのもつ意味内容は、redouterがなくなればこの後者のもっていた内容をすべて吸収して豊かになるであろう。もっと極端な例を挙げよう。《chien (犬)》という語は、《loup (狼)》なる語が存在しない限り、狼をも指すであろう。このように、語は体系に依存している。孤立した記号というものはないのである。」

(SM II、1881)

「価値という語をめぐる我々が述べたことは、次の原理を措定することによっても言い換えることができる。すなわち、言語の中には(つまり一言語状態の中には)差異しかない。差異というと、我々は差異がその間に樹立される積極的な辞項を想起しがちである。しかし、言語の中には積極的な辞項をもたない差異しかない、という逆説である。そこにこそ、逆説的真理があるのだ。」(SM III、1939)

「言語学においては、現象と単位の違いは認められない。すべての現象は関係の間の関係である。或いは、差異について語ろう。すべては、対立として用いられた差異に過ぎず、対立が価値を生み出す。差異の中には、現象と呼ぶことが出来る差異があるのである。」(SM II、1968)

b) 丸山の解説

丸山によれば、ソシュールが考えていた体系は、一般に通用している概念とは異なっている。体系の一般的定義は「個々の要素が相互にかかわりあっている総体、それぞれが密接な関係におかれた部分からなる全体」といったものである。これに対し、ソシュールの体系は何よりもまず価値の体系であり、そこでは自然的、絶対的特性によって定義される個々の要素が寄り集まって全体を作るのではなく、全体との関連と、他の要素との相互関係の中ではじめて個々の価値が生じるとされている。さらに丸山は、この体系においては、単位という客観的な実体は存在しないと主張している。

ラングはそれが体系である限り、不連続な単位の存立を想定させる。しかしその単位は、ア・プリオリに自然の中に見出される実体ではない。ソシュールの体系は、言語の本質に関わる恣意性、形相性、否定性と切り離しては論じられない、というのである。

ラングを構成する諸要素は、その共存それ自体によって相互に価値を決定しあっている。価値は対立から生じ、関係の網の目に生まれる。個々の項の大きさとか実体性というものはもともと存在せず、あるのは隣接諸項との間に保つ関係だけだというわけである。

つまり言語の中には差異しなく、すべては、これらの差異を対立化する語る主体の活動と意識から生まれ、この対立化現象こそが真の単位であって、ソシュールは現象と単位をほとんど同義に解していると丸山は解釈している。

②連辞関係と連合関係

a) ソシュール原資料

「ある語が隣接し、配列され、近づけられ、他の語と接触する様式は二つあり、これ

を語の二つの存在の場、もしくは語同士の間関係の二つの領域と呼ぶことができる」(SM II、1982)

「連合系は時には意味と形態の二重の共通性、時にはそのいずれかのみ共通性から生ずる」(SM III、2028)

「ある語がその周囲に持っているものは、言語学者によって、ある時は連辞領域において、またある時は連合領域において議論されるであろう。その語の周囲に連辞的に在るものというのは、その前後に来るものであり、そのコンテキストである。それに対して、その語の周囲に連合的に存在するものはいかなるコンテキストにも置かれず、意識から生ずる(意識の絆によって結合される)ものであって、空間(時間)の観念はない。…その結合は一方は《顕在的》、他方は《潜在的》であると言えよう。」(SM III、2000)

「顕在している語と、その語に精神が連合する語との諸関係の総和は、潜在系列、記憶によって形成された系列、想起の系列であり、顕在単位同士が作る連鎖、連辞とは対照的である。」(SM III、2004、3)

「我々は、連辞=連合という二つの領域を区別するために、ラング=パロールなる二つの領域を混合しているのではあるまいか。」(SM III、2010)

「一方に、記憶の仕切り箱にあたる内的宝庫がある。…第二の場において活動し得るすべてがそろえられているのはこの宝庫内である。そして第二のものは、言述であり、パロールの連鎖である。語の存在場であるそのいずれかに身を置くことによって我々は語群と関わりをもつが、この二つはまったく性質を異にした語群なのだ。」(SM II、1998)

「だが、この点においてパロールの事実とラングの事実を分けることができるであろうか。語とか文法的形態を考えるならば、これらすべてはラングの中に与えられており、一定の状態に固定している。しかし、そこには常に各人の選択に任された結合という個人的要素もあるのであって、個人が文の中に自らの思想を表現することも事実である。この結合はパロールに属する。何となればそれは実行なのだから。この部分(ラングなるコードの個人的行使の二番目の行為)が問題を提起するのだ。ラングに与えられているものと、個人のイニシアティブに任されているものとの間に或る種の流動性が見られるのは統辞においてでしかない。[ラングとパロールの]境界画定をなすのは困難である。」(SM III、2022)

「まさにここにおいて、二つの領域の境界線に微妙な問題が生ずる。解決は容易ではない。いずれにしても、ラングに属する事実の中にさえ、連辞が存在することは間違いない。」(SM III、2013)

「我々が語るのは、連辞によってのみである。そのメカニズムは恐らく、我々が連辞の型を頭脳の中に持っていて、それらの型を用いる時に連合語群を介入させているのである。」(SM II、2019)

「文においては、すべてが主語と述語に還元される。…しかし、この主語と述語というのは、他の原理に基づいて区別された《品詞》とは何の関係もない。」(手稿15、3306)

b) 丸山の解説

丸山によれば、ソシユールは語同士の間関係、ある語が他の語と接触する様式を二つに分けた。

第一の関係は顕在的な連辞関係である。話された言葉は時間的に線状の性質をもっており、その発話内に現れた個々の要素は、他の要素との対比関係におかれてはじめて差異化され意味をもつ。つまりある言葉が多義的な場合、その意味は一定の文脈のなかでしか決定されない。

第二の関係は、各要素と体系全体との関係で、その場に現れる資格は持ちながらもたまたま話者が別の要素をすでに選択してしまったためその文脈からは排除される要素群との潜在的な関係でこの関係にある一連の言葉が連合関係と呼ばれた。

連辞が現実に生まれるのは二つの関係の相互の働きによるものであり、主体が語る際には連合の場において孤立した諸単位を選択し結合するのではない。記憶の倉庫の中に存在する諸単位はただ単に連合関係の軸によって共存し互いに価値を限定しあっているのみでなく、連辞を形成する結合価値を担っているのである。

③ 共時態と通時態

a) ソシユール原資料

「私は何年も以前から、言語学は二重の科学であるという確信を抱いている。それはまことに根底的に、決定的に二重であるので、実を言うと、あの言語学の名のもとに、作り物の統一体を維持できる十分な理由があるのかどうか、疑わしいとさえ言えるほどである。この作り物の統一体こそ、まさしくすべての誤謬、そこから抜け出ることのできないすべての畏の根源であって、我々は毎日のようにこれと闘っているとはいえ、自らの全くの無力感を覚えずにはいられない。」(手稿10、3297)

「言語学には二つの異なった科学がある。静態または共時言語学と、動態または通時言語学がそれである。」(SM II、1343)

「共時的(=言語の一定時期に属する)という語は少々不確かな点もある。同時的なものはすべて同じ秩序を構成するように思わせかねない。特定共時的(=特定の一言語に対応する独自の秩序における)とつけ加えるべきである。」(SM II、1508)

「ポップに始まる言語学が確立され実践される以前の言語理論家たちは、言語をチェスの駒の位置のように見做し続けた。…チェスには打ちがあることを発見した歴史文法学者たちは、彼らの先駆者たちを馬鹿にして、今度は一連の打ちしか認めず、そこにこそゲームの完全な展望があると主張して駒の位置などは気にもかけないようである。…さて、この二つの誤謬のうちいずれがその結果においてより危険度が大きいかを言うのは難しいが、我々は、そのいずれにも、片時といえど組するものではない。我々は、言語とチェスを比較できるとしたら、それは同時に位置と打ちから成立する、つまり同時に変化と状態からなる完全な意味でのチェスゲームでしかないことを確信している。」(手稿10、3297)

「ある体系がもう一つの体系を生み出したのではない。体系の中の一つの要素が変えられ、その結果もう一つの体系が生まれたのである。通時的展望の下では、体系とは全

く関係のない一連の事実と直面することになる。たとえそれらが体系を条件づけることがあるとしても。」(SM III、1423)

「あらゆる瞬間に、コトバは同時に体系であり進化である。あらゆる瞬間に、それは一つの制度であり過去の産物である。」(SM II、143)

「コトバがその存在のいかなる瞬間においても一つの歴史的産物であるということは、明白である。」(手稿10、3297)

「言語の研究を深めれば深めるほど、言語の中のすべては歴史であること、…すなわち言語は事象から構成されていて法則から成っているのではないこと、コトバにおいて有機的に見えるものはすべて、実は偶然であり完全に偶発的であるという事実がわかってくるのである。」(手稿1、3283)

「一つの事象がどの程度に存在するかということを知るためには、それがどの程度に語る主体の意識に在るか、それがどの程度に意味を有するかということを探究すべきであろう。したがって、[共時態における]唯一の展望、唯一の方法は、語る主体によって感じられているものを観察することである。」(SM II、1504)

「言語において具体的なものは、語る主体の意識にあるものすべてのことである。」(SM III、2195)

「経済学は、いくつかの社会的価値の間の均衡を研究する。すなわち、労働の価値と資本の価値がそれである。しかしこの分野においては前に挙げたすべての科学とは違って、経済学史(時間の中の経済学)と経済学という二つの異なった講座がある。

三番目の段階として価値体系(恣意的価値—記号学のように恣意的に決定し得る価値—)に至ると、この二つの軸を区別する必要性は最高度に達する。…少なくともその一面においてこの価値がその足場を、その根を事物の中においている限り、一たとえば z なる地所が五万フランするとした場合—この価値を時間の推移の中で、その変動とともに追うことは、まだ比較的容易である。…しかし、これは何らかの触知可能な基盤を保っているものであり、そこには、物質性が残るであろう。これに反して、記号を構成する結びつきにおいては、二つの価値[シニフィエ、シニフィアン]の差異から生ずるもの以外の何もものもない。これが記号の恣意性の原理である。…

すべての価値は隣接する価値もしくは対立する価値に依存する。そしてまた、ある変化、一つの関係のずれが起きるのも自明の理であるとしたら、いくつかの時代を混合して一列に並んだ諸辞項を前に、どの様な判断を下したらよいか。価値もしくは同時代性、これは同義語である。」(SM III、1310、1318、1311、1324、1326、1327、1328、1329、1357)

「記号は、すべての価値と同様に、恣意的である。このため、事物にはその基盤をもっていないので、記号を時間の推移によって追うことはより一層困難となるのである。」(SM III、3350)

b) 丸山の解説

ソシユールは、ある一定時期の言語の記述を共時言語学と呼び、時代とともに変化する言語の記述を通時言語学と呼んでいる。

その際ソシユールは、共時態の変遷としての通時言語学の存在理由は認めたものの、

個の通時的变化は言語学の対象としなかった。もし、言語のなかに、すこしでも自然的に与えられたものがあれば、体系とは無関係な歴史的变化の研究や変化の法則性も言語学の本質に関わる問題となったであろう。

しかしソシュールにとっては言語は社会的産物であると同時に歴史的産物以外の何ものでもなく、換言すれば全くの人為であり、文化の産物であり、恣意的価値体系なのである。そして、この非自然という意味での恣意的価値の本質は、記号学によってしか解明されないのである。

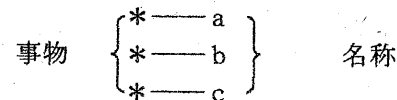
3) 記号理論

①言語名称目録観の否定

a) ソシュール原資料

「コトバについて哲学者がもっている、あるいは少なくとも提供している考え方の大部分は、我々の始祖アダムを思わせるようなものである。すなわち、アダムはさまざまな動物を傍らに呼んで、それぞれに名前をつけたという。…コトバの根底は名前によって構成されていない。…それにもかかわらず、[哲学者の考えには]コトバが究極的にいかなるものかを見る上で、我々が看過することも黙認することもできないある傾向の考え方が、暗黙のうちに存在する。それは事物の名称目録という考え方である。

それによれば、まず事物があって、それから記号ということになる。したがって、これは我々が常に否定することであるが、記号に与えられる外的な基盤があることになり、コトバは次のような関係によって表されるだろう。



ところが、真の図式は、 $a-b-c$ なのであって、これには事物に基づく $*-a$ といったような実際の関係のすべての認識の外にあるのだ。」(手稿12、3299)」

「記号を個別に即自的なものとして捉える誤謬。一五百の語から成る一つの言語が、五百の記号と五百の意味を表していると考えことは誤りである。一あるいはまた、語が他の語(パラセーム)に取り囲まれていることを忘れて、語とその意味を語ることができると思っている間は、言語現象について何らかのイメージをもてると考えたら間違いである。」(手稿15、3313)

「言語事実を持つ以前に一般的観念について語ることは、牛の前に鋤をつける如き転倒である。」(SM II、1802)

「心理的に、言語を捨象して我々が得られる観念とは何であろうか。そんなものはたぶん存在しない。あるいは存在しても、無定形と呼べる形のもとにでしかない。我々は恐らく、言語の助けを借りずには(もちろん内的言語 *langue interieure* のことであるが)二つの観念を識別する手段をもたないだろう。したがって、それ自体において捉えられた、我々の観念の純粋に概念的な魂は、つまり言語から切り離された魂は、一種の形をもたない星雲のごときものであり、そこでは当初から何ものをも識別し得ない。ま

た今度は言語の側からみても、さまざまな観念は一切既存のものを表象してはいない。次のようなものは存在しないのだ。

(a)他の諸観念に対して、あらかじめ出来上がっていて、全く別物であるような観念。

(b)このような観念に対応する記号。

そうではなくて、言語記号が登場する以前の思考には、何一つとして明瞭に識別されるものはない。これが重要な点である。」(SM III、1821~4)

「いくつかの実例を挙げよう。仮に観念なるものが言語の価値となる以前から人間精神内においてあらかじめ決定されているとしたら、必ずや起こるのであることの一つとして、ある言語の辞項と他の言語の辞項とは、正確に一致するはずである。たとえばフランス語の *cher* (親愛な)とドイツ語の *lieb* とか *theuer* (愛する、親しい)はどうであろうか。正確な照応はない。

juger, estimer (判断・評価する)と *urteilen, erachten* (ほぼ同意)を比べてみても、ドイツ語の表現のなかには、フランス語の表現と部分的にしか一致しない意味群の総体が見出される。言語以前に存在するような、即自的な *cher* の観念などないことがわかるのである。」(SM III、1887、8)

「語る主体は自らが発生するアゴセーム[コトバの抽象的な表現面]も意識しないし、他方純粋観念も意識しない。彼が意識しているのはセーム[体系内の辞項であり、表現と意味が一体化した記号]だけである。」(手稿15、3315)

「そこで、どんな場合にも、我々が捉えて直面するのは、あらかじめ与えられた観念ではなく、体系に内在する価値である。その諸価値がかくかくの概念に対応すると述べるときは、人は言外に次のようなことを言っている。すなわち、これらの諸概念は、自らの内容によって積極的に定義されるのではなく、体系の他の諸事項との間に保つ関係によって否定的に定義される、純粋に示差的な存在であるということ、概念のもつ正確な特性は、それが他のものではないということなのである。」(SM III、1894~7)

「一方、この全く混沌とした領域に対面する音の領域が、あらかじめ明瞭に識別できる観念や単位を提供しているかどうか問うてみることも無意味なことではあるまい。音の領域においてもまた、あらかじめ区切られた、はっきりと識別できる単位は存在しないのである。

一連の音が、それ自体において一つの鑄型であるというのは偽りである。これもまた、それ自体においては思考と同じように混沌たる物質なのだ。」(SM III、1825、6)

「本質的には混沌としている思考も、それが分解されることによって否応なしに正確なものとなり、コトバによって単位として分節化される。」(SM II、1829)

「二つの無定形な魂の譬えとして、水と空気を考えてみよう。気圧が変われば、水の表面は一連の単位へと分解される。これが波である。これは空気と水の間を介する連鎖であって実質を形成しはしない。この波動が二つの結合を表し、言ってみれば、思考と、それ自体は無定形な音の連鎖との合体を表している。二つの組み合わせが、一つの形相を生み出すのである。」(SM II、1831)

「物質的な音に対置し得るものの中に、観念があるということは、根底から…否定せねばならない。物質音に対置可能なものは、《音=観念》であって、絶対に《観念》ではない。」(手稿9、3295a)

b) 丸山の解説

ソシュールはプラトンや聖書以来の伝統的言語観である言語命名論の否定から出発する。われわれの生活世界は、コトバを知る以前からきちんと区別され、分類されているのではない。それぞれの言語のもつ単語が、既成の概念や事物の名づけをするのではなく、その正反対に、コトバがあつてはじめて概念が生まれるのである。

ソシュール以前は、コトバは表現でしかなく、すでに言語以前からカテゴリー化されている事物や、言語以前から存在する純粹概念を指し示す道具と考えられていたが、ソシュール以降の考え方では、コトバは表現であると同時に意味であり、これが逆にそれ自体は混沌たるカオスの如き連続体に反映して現実を非連続化し、概念化するということになる。

コトバは音のイメージであると同時に観念であり、すべての認識はそれが表現体という形をとらない限り認識ではない。そしてこの音=観念は自然のなかにあらかじめ与えられているものではないのだから、さまざまな視点から考察できるような実体ではなく、逆に視点が生み出す事象である。

②シニフィアンとシニフィエ

a) ソシュール原資料

「《シニフィアン》と《シニフィエ》なる用語を用いることによって、この二つの真理の形に一つの修正が加えられるであろう。用語を変更した理由は次のようなものである。一つの記号体系を内部から考察するときには、シニフィアンとシニフィエを措定する、もしくは対置することの意味がある。こうすることによって二つのものが対座させられるからであり、[音の]イメージと概念という対立を傍にのけておくことになるからである。」(SMⅢ、1165)

「記号に代えてセームを用いることの相違もしくは利点。シーニュもセームも音声的である必要はない。しかし、シーニュの方は、体系と慣習の外にある直接的な身振りでもあり得る。セームを、一つの体系に属する、慣習的なシーニュと定義しよう。」(手稿15、3310)

「この ② という図はおそらく存在理由をもっているであろうが、これが価値の二次的産物に過ぎないこともわかる。シニフィエのみでは何物でもなく、それは形のない魂の中に溶解してしまうだろう。シニフィアンの方も同じことなのだ。」(SMⅢ、1846)

「 ① という図式はしたがって言語においては一次的なものではない。cherの価値は二つの面から決定される。観念自体の輪郭、これこそ一言語が我々に与えてくれるところの、諸観念の語への配分なのである。この輪郭が与えられてはじめて、 ① という図式は考察の対象となり得るだろう。」(SMⅢ、1899)

「未来の概念は、ラングの記号によって、未来と他の概念の間に形成される差異次第で存在し、その大きさも差異次第ということになる。こうして我々は、観念の差異に結びつけられた音の差異としてのラングの全体系に直面することが出来る。与えられた積極的な観念は一つもなく、また観念の外にあつて決定される聴覚記号は一つもない。」

(SMⅢ、1941)

「言語の実体を、化学合成物、たとえば水に譬えることもできよう。水は水素と酸素からなっている H_2O である。おそらく、科学においては、それらの元素を分離して、酸素と水素を別々にとり出しても、化学の次元にとどまっている。その反対に、もし言語の水を水素と酸素に分けてしまつたら、もはや言語学の次元にはいないことになる。すでに言語的実体は存在しないのだから。」(SMⅢ、1699)

「シーニュを捉え、空中に浮いている気球のように決して逃がさずに追っていくことが出来るのは、その本質を完全に理解した暁でしかない。—その本質は二重であるが、だからといって気球をふくらませない限りは、その気囊から成るのでもなく、水素から成るのでもない。気体水素自体は、気囊がなければ何の価値ももたない。—気球が《セーム》であり、気囊が《ソーム》である。しかしこれは気囊がシーニュで水素がその意味であるなどという考え方とはほど遠い考え方である。もしそんな考え方に立てば、気球の意味はどこにもなくなってしまうからだ。気球隊員にとっては気球がすべてであるのと同様に、言語学者にとっては、セームがすべてである。」(手稿15、3320)

b) 丸山の解説

記号という用語には、意味に対する表現という日常の意味があり、またそれが体系の概念から離れた孤立したものと考えられる危険性があつた。ソシュールはシニフィアン(記号表現)とシニフィエ(記号内容)という相互依存的なものの結合として記号を捉えたのは、このような危険性に対応するものだった。

第一にシニフィアン、シニフィエの相互依存性について。言語の実体が生まれる時には、思想の物質化が行われるのでもなければ、音の精神化がなされるのでもない。記号はあらかじめ別々に存在する二つの実体を結び合わせて合体させたものではなく、シニフィエとシニフィアンは記号の画定とともに生まれ、お互いの存在を前提としてのみ存在する。

第二に、シニフィアンとシニフィエは不可分である。言語学の対象はあくまで記号であつて、分離されたシニフィエ、シニフィアンではない。

第三に、双方とも心的存在であり、ラング内の要素であつて、シニフィエを言語外現実ないし指向対象とか、シニフィアンを物質音などと考えるはならない。

③形相と実質

a) ソシュール原資料

「すでに見たように、言語記号は二つのまことに異なつた事象の間に精神が樹立する連合であるが、それらの事象は二つとも心的なものであり主体の中に存在する。一つの聴覚映像が一つの概念に連合されているのである。聴覚映像は物質音ではない。これは音の心的な刻印である。」(SMⅢ、1095、6)

「貨幣を作る材料がその価値を決定すると考えたら大変な誤りをおかすことになる。」

同様にある語を構成している根底は音声的実質ではない。」(SMⅡ、1818~20)

「厳密に言うと、シーニュが在るのではなくて、シーニュ間の差異があるだけである。チェコ語の例をひこう。妻という意味の zena の複数属格は zen である。この言語の中にあつて、zena, zen の存在価値は、以前に存在していた zena とその複数属格 zenu と全く同様である。どちらがより優れている対立とも言えない。…シーニュ間の差異だけが働いている。zenu の価値は、それが zena と異なることから生じ、zen の価値もそれが zena と異なることから生ずる。」(SMⅢ、1911)

「コトバの事実に関係するすべての規則、すべての文、すべての語が必然的に喚起するものは、a 対 b という関係か、あるいは a / a' という関係であつて、これを切り離して分析すると何も意味しなくなる恐れがある。これはまさに、a とか b という辞項は、そのままでは意識の領域に達することができず、意識が知覚するものは常に a と b の間の差異でしかないという理由からである。」(手稿10)

「音が語における二次的なものであり相対的なものであるという事実は逆説的に見えるかも知れないが、このことは語や単位に結びつけられている観念についても言えるのであつて、観念のみでは価値の一面しか表さず、これは純粋心理学の対象物でしかない。」(SMⅡ、1916)

「…もし心理的現実と音声的現実があるとしても、別々に分けられた二つの系列のいずれかが、いかなる瞬間においても、言語事象をいささかたりとも生み出すことはあり得ない。言語事象が存在するためには、特殊な種類の結合が必要である。」(手稿13、3310)

「言語学において、第一の秩序である音と、第二の秩序である意味を選り分けることができるなどと考えることは、大いなる幻想であることは別のところで確認した。その理由は簡単である。根底的に言って言語事象なるものは、これら二つのもののいずれによつても構成されることがあり得ず、それが存在するために要請されるものは、一つの対応関係、一つの相関関係であり、いかなる瞬間にも、一つの実質もしくは二つの実質ではないからなのだ。」(手稿14a、3303)

「言語は一つの信号体系である。言語を構成しているものは、これらの信号間に精神が樹立する関係であり、信号の素材は、それ自体においては非関与的なものと見做されることが出来る。我々が、信号のために一つの音的素材を、そして唯一の素材を用いざるを得ないことは確かだが、仮に音が変化しても、関係が変わらない限り、言語学はそのような音変化には係わらない。」(SMⅠ、3348)

「対立として用いられた差異に過ぎず、この対立が価値を生み出す。」(SMⅡ、1963)

「言語学においては現象と単位の間には根本的な違いはない。…すべての現象は、関係の間に樹立される関係である。」(SMⅡ、1964、8)

「コトバは、そのいかなる表示においても一つの素材〔この語は一度書かれて抹消されている〕、実質を呈することはなく、ただそこにあるものは、生理的・物理的・精神的な力によつて結合されたり引き離されたりする活動だけである。」(手稿9、3295)

「言語は音のイメージと、心的対立の上に成り立つ体系である。綴織に譬えてみよう。重要なことは、一連の視覚印象なのであり、色調の組み合わせが織物の意味を形成するのであつて、糸がどのように染められたかというようなことではない。」(SMⅢ、645、6)

b) 丸山の解説

ソシュールが用いる形相(フォルム)の概念は、内容に対応する形式という意味ではない。それは実質(実体)と対応するもので、ソシュールによれば表現と内容のいずれにも形相と実質という二つのレベルで見ようとしている。

ソシュールは一度たりともシニフィアンに対するシニフィエの優位を語ったことはなく、実質に対する形相の優位性であり、言語の本質は実質ではなく形相であることを強調しただけである。そして実質というものも、必ずしも物理的・物質的材料のことではない。確かに、シニフィアンを現前せしめる実質は、自然言語の場合に限って言えば物質音ということになるが、シニフィエの網を投影させて区切られる意味の実質が、物理的・生理的なものでないことは言うまでもない。シニフィアン、シニフィエともに形相であるということは、そのいずれもが、アプリオリに存在し、絶対的特性によって定義されるものではなく、価値体系内の関係の網の目であるという事実の指摘であり、ソシュールが説いたのは、そのような即自的実体に対する関係の優位性であった。

形相の世界を、視点によって対象が創られる文化の世界と呼び、実質の世界を自然界と呼ぶことができる。

言語の中には差異しかない。それでは意味はどこに求めたらよいのであろうか。ソシュールによれば、コトバの意味は綴織と同じように差異と差異のモザイクから生まれるのである。

④言語記号の恣意性

a) ソシュール原資料

「言語記号は恣意的である。与えられた聴覚映像と特定の概念を結ぶ絆は、そしてこれに記号の価値を付与する絆は、根底的に恣意的な絆である。…記号は恣意的である。つまり、たとえば soeur (姉妹) という概念は、いかなる性格、いかなる内的関係によつても、これに対応する聴覚映像を形成する一連の s+o+r という音とは結ばれていない。」(SMⅢ、1123、1124)

「言語事実がその間に起きるこれら二つの領域が無定形であるばかりか、二つを結ぶ絆の選択、価値を生み出す二つの領域の合体は、完全に恣意的である。」(SMⅢ、1839)

「価値の観念は、概念の〔ア・プリオリな〕不確定性から演繹されたものだった。シニフィエをシニフィアンに結ぶ図式は、原初的な図式ではない。」(SMⅢ、1894)

「 Θ という図式はしたがって言語においては一次的なものではない。cher の価値は二つの面から決定される。観念自体の輪郭、これこそ一言語が我々に与えてくれるところの、諸観念の語への配分なのである。この輪郭が与えられてはじめて、 Θ という図式は考察の対象となり得るだろう。」(SMⅢ、1899)

「シニフィアンとシニフィエの絆は、人が混沌たる塊に働きかけて切り取ることの出

来るかくかくの聴覚記号とかくかくの観念の切片の結合から生じた特定の価値のおかげで、結ばれる。この関係が即自的に与えられていたと言えるためには、何が必要であろうか。まず何よりも、観念があらかじめ決定されている必要があるだろう。しかし実際には決定されていない。まず何よりもシニフィエがあらかじめ決定されている事物であった必要がある。しかし実際にはそうではないのである。」(SMⅢ、1899)

「ドイツ語もしくはラテン語の複数がもつ価値は、サンスクリットの複数がもつ価値ではないが、その意義は同じである。その理由は、サンスクリットには双数があることによる。」(SMⅢ、1896)

「それを用いるべく運命づけられている人間社会との関連においては、記号はいささかも自由なものではなく、課せられたものである。…個人がフランス語のある単語とかある法を変えようと望んでも、それは不可能であろうし、大衆といえどもそうすることは出来まい。大衆は、あるがままのラングに縛りつけられているのである。」(SMⅢ、1177、1181)

「そこには差異しかない。積極的(+)な辞項は一切存在しない。…シニフィアの働きは差異に基づいている。同様に、シニフィエを考えてみても、そこには聴覚的次元の差異によって条件づけられるであろう差異しかない。…こうして我々は、観念の差異に結びつけられた音の差異としてのラングの全体系に直面することが出来る。与えられた積極的(+)な観念は一つもなく、また観念の外にあって決定される聴覚記号は一つもない。しかし、相互に条件づけあう差異のおかげで、つまり、かくかくの〔聴覚〕記号の差異(-)とかくかくの観念の差異(-)が結ばれたために、我々は何か積極的

(+)な実体に似たものを相手にすることになる。この結合の積極的(+)な要素があるために、そこにはもはや差異しかないとは言えず、我々は対立について語る事が出来るだろう。」(SMⅢ、1941、1945、1948)

「シーニュは、すべての価値と同様に、恣意的であるというこの基本原理を忘れてはならない。このため、事物にはその基盤を置いていないので、シーニュを時間の推移によって追うことがより一層困難となるのである。」(SMⅢ、3350)

「シーニュに一つの機能、一つの価値を与えることができるのは、シーニュ間の差異だけである。もしシーニュが恣意的でなかったら、ラングの中に差異しかないとは言えないであろう。」(SMⅢ、1908)

「この領域においては、人が事物間に樹立する絆が事物自体に先立って存在し、これらの事物を決定する働きをなす。…ここにはまず視点があり、…それによって人は二次的に事物を創造する。…いかなる事物も、いかなる対象も、一瞬たりとも即自的には与えられていない。」(手稿9、3295a)

b) 丸山の解説

記号のもつ恣意性について、例えば、事物と言葉の間には何ら必然的な結びつきがない、という意味にとってはならない。ソシュールが述べた恣意性には次の二つの意味がある。

第一の恣意性は記号内部のシニフィアンとシニフィエの関係において見出される。つまり記号の担っている概念とそれを表現する聴覚映像との間には、いささかも自然的か

つ論理的絆がない、という事実である。

これに対して第二の恣意性は、一言語体系内の記号同士の横の関係に見出されるもので、個々の群項のもつ価値が、その体系内に共存する他の群項との対立関係からのみ決定されるということである。

ソシュールにとっての言語記号とは、思考の無定型な塊から恣意的に切り取られた概念と、音の連続体から同じように恣意的に切り取られた物質音の結合が言語主体の心の中に残すイメージとしての刻印であるのだから、我々の現実もしくは事物のカテゴリー化は、ラングの事象であり、我々が外界を見るのは言語を通してであり、その連続体に区切りを入れるのは我々の言語の意味体系なのであって、その布置構造が言語次第でさまざまに異なるのは当然であろう。

恣意性を非自然性と正しく解することにより、言語がはじめから即自的に定義され限定される単位を有さないことも、その単位というものが辞項そのものではなく、辞項と辞項との間の差異の対立化という現象であることも、その対立現象を樹立するのは言語主体の意識であることも明確に理解できるのである。

⑤記号学と神話・アナグラム研究

a) ソシュール原資料

「言語は一つの信号体系である。言語を構成しているものは、これらの信号間に精神が樹立する関係であり、信号の素材は、それ自体においては非関与的なものと見做されることが出来る。我々が、信号のために一つの音的素材を、そして唯一の素材を使用せざるを得ないことは確かだが、かりに音が変化しても、関係が変わらない限り、言語学はそのような音変化には係わらない。(例えば海上信号を考えてみよう。信号板の色が褪せようと、体系にとっての変化は一切ないのである。)」(SMⅠ、3348)

「一般的なすべての記号体系と同様に、ラングの特徴とは、一つの事物を弁別するものと、それを構成するものが同じであるというところにある。」(手稿19、3328)

「言語事象にとっては、《要素》と《性質》は永遠に同一物である。すべての記号学的体系と同様に、一つの事物を区別するものと、その事物を構成するもの間に違いが認められないというのが、ラングの特性である。(何故なら、ここで言う《事物》とは記号であって、これら記号の役割、本質は、他の記号と別物であること以外にないからだ。)」(手稿24a、3342)

「すべての記号は、純粋に、否定的な相互位置関係に拠っている。」(手稿12、3299)

「(この自ら意味を生産し得る言語記号さえも、)法律よりはるか以上に人が押しつけるものであって、創るものではない。」(SMⅡ、1183)

「ラングはディスクールを目的にして作られたものに過ぎないが、ディスクールとラングを分かつものは何であろうか。あるいは、或る時に、ラングがディスクールとして活動化されると言わしめるものは何であろうか。

たとえば boeuf (牛)、lac (湖)、ciel (空)、rouge (赤い)、triste (悲しい)、cinq (五)、fendre (裂く)、voir (見る) といったさまざまな概念は、ラングの中にいつでも出動可能な状態で(つまり言語形態をまとして)、そこにある。いったいいか

なる瞬間に、あるいはいかなる操作のおかげで、それら諸概念の間に樹立されるいかなる働きによって、いかなる条件のもとに、これらの概念はディスクールを形成するのであろうか。

これらの語をただ並べただけでは、それが喚起する書観念がいかに豊かであろうとも、ある一人の人間個人に対して他の人間個人がそれを口にして、彼に何事かを意味しようとすることを決して示しはしないだろう。ラングの中にあって自由に使用し得る辞項を用いて人が何かを意味しようとしていることがわかるためには、何が必要なのか。それは、ディスクールとは何かを知るのと同じ問であり、一見したところ答は簡単である。すなわちディスクールとは、たとえそれが原初的なやり方であれ、また我々が知らない手段によるものであれ、言語形態をまとめて存在している二つの概念の間に一つの絆を確立することであり、これに対してラングの方は、あらかじめ孤立した諸概念を実現するだけである。これらの概念は、思考の意味を現前せしめるためにお互いの間で関係づけられるのを待ち受けているのである。」(手稿 Ms. fr. 3961)

「創造的活動は結合活動にほかならず、新たなる結合の創出である。しかし、この結合はいかなる素材から構成されるのか。それらの素材は外部から与えられるのではない。ラングがラング自身の中から汲みあげねばならないのだ。」(SMI、2573)

「ラングは、自らの布地を用いて作ったつぎはぎ細工から成るドレスである。」(SMI、2616)

「この分野〔＝神話〕においても言語学に関連する分野と同様に、非存在物であるところの語とか神話上の人物とかアルファベットの文字を問題にするときの同一性とは何かということ、つまり同一性の性格についての考察が不十分であるために、すべての誤った考え方が生ずる。これらの語や神話上の人物や文字は、哲学的な意味で《記号》のさまざまな形に過ぎないのだから。」(手稿 Ms. fr. 3958)

「一伝説は一連のシンボルで構成されている。

一これらのシンボルは、…言語の語がそれにあたるシンボルのような、すべての他の一連のシンボルと同じ変遷と同じ法則のもとにおかれている。

一それらはすべて記号学に属している。

一シンボルが固定しているはずだとか、それが無限に変化するはずだなどといったことを仮定する方法は一つもない。それはたぶん、ある制限内で変化するに違いない。

一シンボルの同一性は、それがシンボルとなった瞬間から、すなわち刻々とその価値を定める社会大衆の中に流布された瞬間から、決して固定したものではなくなる。」

(手稿 Ms. fr. 3958)

b) 丸山の解説

空の色とか煙とかの自然的指標は、それが告知する事象との間に法則的に結びつけられており、記号学の対象とはならない。それは人間が発見する構造である。これに対し、記号学の対象となる人工的指標が属する構造は、人間が創り出す文化的・社会的(=恣意的)構造なのである。

次に、人工的指標に属する信号と言語とは、前者の体系の基本単位が記号ではなく、一つの既成の言表(メッセージ)であるのに対し、後者は記号の体系であって、この記

号の言表化はディスクール活動として、個々人の自由に任されている、という根本的相違がある。

他方、アナグラムとは「一語あるいは一文中の数語の文字の配置を変えて、その文字が全く違う意味をもった他の一語または数語を構成するようにすること」で、詩的言語に見られる。ソシュールはこの詩的言語に含まれるアナグラムが詩人の意識的な営為かどうかに関心をもった。

ディスクール活動は単に既成の語を新たな関係のもとに置くのみならず、記号化したコトバが閉じ込めている線的世界から空間へ、そして空間から時間へと次元を広げることによって言語を破壊し、言語化以前の欲動の世界(自然)と構成された構造(文化)との間をたえず上向・下向運動を繰り返しながら、クリステヴァの言うル・セミオティックの再活性化によって、ル・サンボリックな体系の再布置化を可能にさせるものとなる。ソシュールの考えたコトバの本質は、まさにこの意味形成の運動過程にほかならない。

B 丸山圭三郎『ソシュールを読む』

一別冊付録の解説にかえて一

はじめに

別冊付録は、丸山『ソシュールを読む』(岩波書店)で訳出されているソシュールの3回の講義のうち、訳本のない第1、及び第3回講義の部分を集めたものである。

研究方法としては、まず訳本のある第2回講義序説(前田訳『ソシュール講義録注解』)を読んだあと、付録へと進むべきであろう。

なお、『ソシュールを読む』から丸山の解釈について簡単に紹介しておくが、主として思想的な事柄に重点をおき、言語学の個別専門的な内容についてはふれていない。

1) 第1回講義の内容

①講義Iの構成と視点

コトバの問題に取り組む際に二つの方法がある。理論的方法(総合)と実際的方法(分析)がそれであるが、後者の方法を用いている。

その内容は、コトバを実体論的にあつかい、自然科学の方法をモデルとして言語現象を見る実証主義的態度への異議申し立て。

②実体論批判

言語変化を転訛と見、完全だった言語が時代とともに頽廃したり、地理的な辺境にお

いては訛ってしまうと考えることは誤り。

文字表記と音声に関し、前者に特権的なものを見る考えへの批判。

実体的同一性と関係的同一性との混同への批判。

関係的存在は「ではない」という否定的な要素によってしか定義できず「である」という実定的な要素によっては規定できない。

文字表記も音声も、ともにラング（言語）の本質をおおいかくしている。

実体概念から関係概念への転回

③言語の非自然性

言語を生きた有機体とするシュライヒャー説の批判。

コトバという生得能力と、他の一切の本能との区別の必要性。

言語は本質的に恣意的、非自然的であるとともに、言語という制度の無意識的使用からくる惰性化現象の強さ。

関係の世界においては個は存在しない、私たちの意識に達するのは個と個の、少なくとも二つ以上の項の対立でしかない。

④類推現象とラング・パロールの相互依存性

類推による変化は、音声変化とちがって、関係そのものにインパクトを与える関係的变化である。

ラングとパロールの相互依存性が、これら二つをともに社会的事実として構成し、構成される状態と個人の次元の双方から観察している。

⑤「客観的分析」批判

コトバの要素は、ア・プリオリに分節されている実体ではなく、語る主体の意識が連続体を分節し、意味世界という不連続なゲシュタルトを構成したときにはじめて存在する。

ソシュールが批判の対象としたものは、多様な質でしかないものを、量的な差異、数量に還元してしまう、近代科学一般がもっている避けがたい傾向である。

2) 第2回講義の内容（※これについては訳書がある）

①講義Ⅱの構成と視点

二つの序説から成るが、前半の方が重要で、記号学とは何かということテーマとしている。

②コトバの両義性とランゲージ、ラング、パロール

日常的現象から出発。人が勝手に選んだように見える単語とその意味も決して変えることができないという面と、現に時代とともに変化する、という相反する面があること、等々。

ここからソシュールが言おうとしたことは、一つには恣意性と固定性、偶然性と必然性、というパラドックス、二つには言語の形相性、つまり関係としての本質は、いかなる感覚与件を支えにしても顕在化するという原理。

ランゲージ、ラング、パロールの概念。

ランゲージは人間特有のシンボル化能力、ラングはランゲージが特定の社会の中で制度化した構造であり、パロールはその条件下で個人が行う発話行為。

③記号学の誕生

記号の本質、文化（歴史、社会現象）を非自然的、関係的な世界と見る視点。言語学はより大きい記号学という学問に包摂される。

記号学とは言語を含めた一切の記号の科学、契約ないしは慣習という手段を用いて、人が自らの思考を表現するときに生み出される諸事象の研究。

④単位、同一性、価値

単位の非実在性。実体としての単位はどこにも与えられておらず、在るものは単位を存在せしめる関係だけであり、関係を樹立する人間の視点だけ。

そもそも同一性には二種ある。一つは個的・実体的同一性、もう一つは構造的・関係的同一性。後者の方は人間のつくり出した文化の中にだけ見出されるもので、これはネガティブな関係が生み出した、一切実体的裏付けのない同一性で、形相（フォルム）の世界とは、この第二の構造的・関係的同一性と差異に操作される世界に他ならない。文化の世界に実質的なものが皆無である、ということではなくて、文化の本質は形相であり、実質はその支えにすぎない、ということ。

ソシュールにとっての語の価値とは、体系内の他の辞項との相互的位置と対立関係から生まれる差異にすぎず一種の潜勢である。これに対して、語の意義の方は、文の中におかれてはじめて生まれるもので、これは実現可能態としての価値の何分の一かにあたる実現されたものにすぎない。

ソシュールは明示していないが、丸山は、価値も意義もラングのレベルに属し、パロールに属するものは意味であると考えている。

⑤構造と歴史

ソシュールは共時言語学と通時言語学という二つの学の存在理由を明らかにしたのち、方法論的には共時態の解明が先行すべきとみた。すべての個別現象をまずある時点の体系の中において共時的に捉えたのち、もう一つの体系への移行を通時的にとりあげなければならない。

ソシュールにとっては、言語は社会的産物であると同時に歴史的産物以外の何ものでもなく、全くの人為であり、共同幻想としての恣意的価値体系なのである。

⑥連辞関係と連合関係

従来理論は形態論、統辞論、語彙論から成り、形態論は個々の語の構造を分析し、それがどのような下位単位から成るかを見るものであり、統辞論は語同士がどのように結合して句や文をつくるか、という規則を記述するものであり、語彙論は語の意味を分析したり、その意味場を明らかにしたりするものとされてきた。この伝統的区分は明らかに実体論的発想にたっている。

ソシュールはこの区分に代わるものとして、連辞関係と連合関係を提起した。

何故既存の語を組み合わせ、かつて一度も存在しなかったメッセージを形成することが可能なのか、といえ、それは一つ一つの記号が、それだけでは何も意味しない差異にすぎないからで、意味は差異が織りなすモザイクから生じ、意味とは実体ではなく、差異の網目の間の空間だから。

3) 第3回講義の内容

①講義Ⅲの構成と視点

講義Ⅲの方法は講義Ⅱと同じ。それは講義Ⅱの序説で提起された全ての問題を掘り、深めたもの。その内容の中心はラングとは何か、ということ。

②恣意性の原理

恣意性の原理は誤解されている。シニフィアンがシニフィエと不可分な音響イメージだという点が捉えられず、それが直ちに記号と捉えられ、この記号とそれが指し示すシニフィエとの間に恣意性があるかどうか、という問題に矮小化された。

ソシュールの提起は、事物や概念の分節は言語の網をかける以前には存在しなかったのであって、その分節の基盤は、言語外現実のなかではなく、言語体系自体のうちにあり、まことに不自然な尺度である、ということだった。

③線状性の原理と言語の本質

言語記号の本質は、非実体としての関係にのみ基づく非自然的価値であり、連続体である多次元の現実であるモノを非連続的次元の世界に置き換えて、これをコト化している、という点に見出される。

丸山の文化のフェティシズム論。文化のなかにも自然的要素が混在しているんだ、などという考えから抜け出さない限り、文化のフェティシズムの正体は見えてこない。つまり文化現象一般が、言語と同じように人為によって生み出されたことという関係に過ぎず、モノ自体はすでにもう生の形では存在しないということ、そしてコトの本質は非自然であり、人間が動物と同じようにコト以前の感覚＝運動的なものを保有しながらも、これが破綻してしまっ、二重、三重に自然から引き離されてしまっていることを冷徹な目で見極めねばならない。

④価値の恣意性と示差性

差異は否定的なモノで実体は実定的なものである。ところでコトバにおいては、差異と差異とが結ばれ、何か実定的なもの、実体に似たものをつくりだす。これを実体と見誤る恐れが生じ、関係にすぎない存在が物神化される恐れもでてくる。私たちの意識に差異が否定的なままで達しておれば記号がコトであることは非常に見分けやすいが、記号が全体としては、実定的であるため、物とコトとが混同されやすい。つまり関係が実体として、非自然が自然として、恣意的価値が即自的価値として、一言でいえばコトが物として、私たちに意識される。

ラングがはじめから即自的に定義され限定される単位をもっていないことも、その単位というものが実は辞項そのものではなく、辞項と辞項との間の差異の対立化という現象であることも、そしてその対立現象を樹立するのは語る主体の意識であることも、はっきり理解されよう。

第6期ASSBの刊行にあたって

前号の巻末で当面の研究の基本的な方向として、21世紀の社会運動の方針の確定、と書きました。それを受けて、今回は冒頭で文化知の創造という課題を提起しました。ここからは尽山の研究課題が出てきますが、さしあたってはソシユール論、という形で、語学、記号学批判にとり組むことにしています。

なお、今回の主要内容は実はソシユール論にとり組む前提として作成した研究資料で、次号に予定している本論とセットで研究してほしいと考えています。

そのあと、科学批判にとり組みます。第6期は、理論的分野については言語、記号、科学をとりあげ、あとは実践的課題で誌面を構成する予定です。

『奪われし未来』で環境ホルモンがとりあげられ、世間での関心が高まっています。環境ホルモンは毒性や発ガン性のテストにはひっかからないし、これ以上の濃度は危険といった限界値もありません。科学知の方法では捉えどころがなく、従ってその危険性を明らかにする作業も遅れたようです。そして、この危険性は実は文化知によって察知されたのではないのでしょうか。

ところでこの問題はオゾンホールやCO₂以上に対応が困難です。恐らく問題解決の直接的な方法は存在しないのでしょう。宇宙的な文化的な解決方法の提案が期待される時代に入ってきています。その提案をつくり出せるよう努力していきます。

会誌の発行は今期も隔月刊とし、1999年3月までに6回発行します。会費は従来通り、正会費1口10万円、賛助会費1口3万円、講読会費1口1万円です。よろしく願います。